

チャイルドエデュケア研究所

年報 2020

18号

桜花学園大学・名古屋短期大学



チャイルドエデュケア
研究所

年報 2020

18号

発行 桜花学園大学・名古屋短期大学

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待48
名古屋短期大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162
桜花学園大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162
2021年3月31日発行

2020年度テーマ

「関係性の中で育つ子ども」

チャイルドエデュケア研究所機構図

目的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

研修・事業部門

- 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業
〈夏のセミナー〉
 - ・卒業生支援
〈冬の講演会〉
 - ・地域へのリカレント教育
- 目的達成のために必要な事業
〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
 - ・子育て交流会
 - ・支援室開放
 - ・さくらんぼ通信の発行
 - ・子育て講座・親子講座
 - ・学生ボランティアの参加

研究部門

- 研究所年報等の刊行物の発行
- 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学术交流
- 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究
〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

- 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★ 3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに	【高須裕美】	2
§ 1 研究・実践報告		
(1) 自己理解・他者理解・関係性理解のためにー交互色彩分割法を通してー	【小嶋玲子】	3
(2) 3歳未満の時期における子どもどうしの関係性	【小川絢子】	5
(3) 関係性の中で育つ子ども	【伊藤茂美】	7
(4) 子どもの心と体を育むわらべうた ー発達支援の視点からとらえたわらべうたの実践ー	【山下直樹】	9
§ 2 2020年度研修報告		
(1) 冬の講演会	【太田早津美】	11
§ 3 2020年度事業報告		
(1) 学生の学びの場としての子育て支援室「さくらんぼ」	【高須裕美・堀由里】	15
(2) 子育て支援室「さくらんぼ」年齢別交流会	【布施佐代子・吉田真弓】	17
(3) 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー	【吉田真弓】	19
(4) これからも子育てに寄り添う支援を目指して	【すまいる】	21
(5) 子どもは遊べば密になるもの。さて、どーする大人？	【塚本岳】	22
(6) 支援室で人気の絵本・遊び紹介	【近藤愛】	23

2021年度事業計画、編集後記

はじめに

2020年は、全世界の多くの人々が目に見えないウイルスに怯え、行動制限による閉塞感に包まれた1年でした。そして、我々は感染予防策を日常的に考えながら生活する事を求められ、今後の歴史に残るような大きな経験を乗り越えようとしています。保育や子育てに従事する皆様にとっても、新しいウイルスによる感染がやってきたということによる恐怖に似た感情と、それと合わせてどのように対処したらよいのかとお困りの面が多々あったと存じます。

桜花学園キャンパスも、学生や子どもの声が聞こえない殺風景で淋しい春を過ごしました。チャイルドエデュケア研究所員は、子育て交流室「さくらんぼ」も開催の目処が立つまで、今何ができるのかを模索し、「さくらんぼ」を再開する際の予防策の検討、環境設定に関わる議論を続けながら、ようやく7月から5組の予約制で事業スタートに漕ぎ着けました。しかしながら、研究所の大きな目的の一つである「学生に向けた教育活動」は、未だ再開できないまま時が過ぎていきます。学生らは、実践の場が多い本学を魅力に入学したにも関わらず、実習だけでなく、子育て支援室「さくらんぼ」にも入室する事ができず、親子を観察したり、子どもを前に実践したりする様々な機会を失いました。時折、学生らが芝生のデッキ近くから、子どもらが遊ぶ様子を眺める姿を目にすると、心苦しい思いが致します。

来室される親御さんにとっても、カフェテリアでランチを取りながら、子育て世代同士で会話を楽しむ事もできず、外にお出かけしたい子どもと、遊ぶ場所を求めて歩く時を過ごされたのではないかと思います。キャンパス周辺にあるカフェには、親子連れが集まっているという事で、子ども同士の交流を求めながら安心して過ごせる場所を探し求める保護者の方々の姿をどうにかできないだろうかと話合っております。

さて、チャイルドエデュケア研究所は、名古屋短期大学・桜花学園大学両大学の保育科・保育学部の共同で2002年に設立した研究所で、研修・事業部門、研究部

門、相談部門という3つの部門で活動している組織ですが、本年度は、「一関係性の中で育つ子ども」をテーマにした講演事業も計画しておりました。リカレント教育の一環であった夏の講演会は、止む無く中止になり、本研究所が主催者として、地域の子育て支援団体・民間の子育て支援組織との企画も予定しておりましたが、こちらも延期になりました。

このような状況の中、本年報では、地域の関係機関でもある豊明市の子育て支援課、および緑児童館から、安心、安全な暮らしを脅かすという状況に、「子育ての現場では何が問題になっているのか」、「大人はどのように考え、理解し、何をすべきか」ということを、私たちが学ぶ場にすべく、保育者や実践者のご報告をご寄稿頂きました。また、教育・保育の実践者、大学教員の為に向けた事業として、何らかの方法で研修の機会を得たいと検討していた折、冬の講演会の掛札逸美氏より遠隔での講演をご提案頂き、初めてオンラインによる冬の講演会を実施致しました。国内外で報告されているデータを基に、新型コロナウイルス感染症にどういった対処をしていけばよいのか、という研修内容も掲載しております。

研究部門としては、大学におけるチャイルドエデュケアの利用状況から、学生の教育活動における場としての役割を整理すべく、研究所員が動き始めているところです。今年は、利用状況と満足度について利用学年別で明らかにしておりますが、今後は、親子の皆様が来室下さることが、親子に役立つ保育者になるために、学生にとっても実践的な学びの契機になり、主体的に学ぶ活動につながっている事を明らかにしていきたいと考えております。さらに、4名の本学教員による研究・報告が掲載されておりますので、ご一読頂けると幸いです。

子育てや保育・教育に悩みは尽きませんが、この年報が子育て世代・実践・研究組織の皆様にとっても、保育や教育に関わる学びの機会となり、「マスクを付けて遊んだ頃もあったね」と、懐かしく読み返せる日が早く来ることを切に願います。

チャイルドエデュケア研究所 所長
高須 裕美



自己理解・他者理解・関係性理解のために —交互色彩分割法を通して—

小嶋玲子 桜花学園大学 保育学部 保育学科

キーワード：自己理解・他者理解・関係性理解・交互色彩分割法・教育効果

目 的

教員・保育者にとって子ども理解の重要性は言うまでもないが、同じ子どもを見ていても見る人によってその子ども理解は異なる。また、同じようにかかわったとしても誰がかかわるかで子どもの反応は変わってくる。よって、教員・保育者になるためには、相手を理解する他者理解に加えて、自分自身の心の動きや対人関係の取り方などの自己理解が求められる。加えて、かかわりの場面で相手と自分の関係がどのようなものか、お互いの関係性を理解することも重要となる。本論は、自己理解・他者理解そして関係性理解のために交互色彩分割法を利用した教育的意図および効果、そして教育上の課題について述べることを目的とする。なお、事例は with コロナ前のものであり、今後実施するにあたっては状況による工夫が必要である。

学校臨床場面での交互色彩分割法

交互色彩分割法は中里（1978）が考案した心理治療技法の1つである。1枚の紙をセラピストとクライアントが交互に線を引いて分割し、その後、交互に彩色をしていく方法であり、主に成人の統合失調症に対するアプローチとして精神科医療の場で研究がなされてきた。筆者は、その作業の容易さゆえに活用されてこなかった学校臨床場面で、交互色彩分割法を適用した。その結果、交互色彩分割法は、その容易さゆえに評価的まなざしからの自由と、見守られる時間・空間を作業する人に保障し、かつ相手との対等な共同作業という点が課題に対する抵抗を和らげ、ラポール形成と相互理解に効果的に働くことを示した（詳細は小嶋2006）。

さらに、交互色彩分割法は、画面分割時と彩色時の「やりとり」を通して、お互いの心の動きを丁寧と感じ取ることで、様々な気づきが両者にもたらされる。よって、小嶋（2006）の今後の課題として教育現場での感受性訓練にも利用できることを示唆した。すでに、小嶋（2006）の論以降、三宅（2009）が教員養成課程におけるカウンセリング実習へ適用し、梶原（2016）が看護学生への人間関係の授業で活用するなど、教育効果については検証されてきている。

自己理解・他者理解・関係性理解としての交互色彩分割法

筆者は上記仮説に基づき、教育相談（大学3年生）の授業で学生たちに自己理解・他者理解、そして関係性理解の一方法として交互色彩分割法を実施している。3人掛け机に2人ペアで座った学生がB5判用紙（A4判も可）に交互に線を引き画面を分割し、その後交互にクレヨン等で彩色する。心理臨床場面では対面での実施が多いが、授業では横並びのペアで実施する。実施方法としては、基本的に枠づけ^(注1)を行い、画面分割線の数および線種（曲線でも可）は任意である。枠づけ線の4辺の内2辺を結んだ線で画面分割するように伝えているが守らない学生もいる。創始者の中里（1978）は「原法をい

くらでもモディファイしてかまわない（p18）」と述べている。筆者は自己理解・他者理解・関係性理解のために、実施中は無言で、自身の気持ちや相手の気持ちを考えながら行うように伝えている。

自己理解・他者理解・関係性理解の様子

以下に交互色彩分割法を実施した学生たちの事後の感想を挙げて、学生たちによる自他の心の動きの観察の様子を検討する。

筆者の授業（教育相談：2クラス合同）では、毎回、別クラスの異なる相手とペアで座るように座席指定していたので（with コロナ以前であり、これらの意図と教育効果については小嶋・河内2017a,bで述べた）、ペアの相手は基本的に親しい関係ではない。事例の感想は匿名性担保のため文意を変えない範囲で変更を加えた。各事例のペア学生を①②とした。

事例A ①相手が直線ばかり引いたのであえて私は曲線で大小の枠ができるようにした。相手が寒色系の原色ばかり使用しているように感じたので、私は暖色系のパステルカラーを塗るようにした。相手は言葉を交わすことが得意そうでなく会話をしない方法がやり易そうに感じた。A②私の直線に対して曲線ばかり引くので相手との距離を感じた。色塗りでも相手は自分の手前に近い部分ばかり塗っていた。それで私が画面の真ん中に色を塗るとその近くを塗ってくれたので私との距離が縮まったと嬉しかった。だから、その後真ん中や相手に近い枠を塗るようにした。最初、距離を感じていたが、相手の塗り方は丁寧で、明るい色を使っていたので実は心を開いてくれていたのかもと後で感じた。



事例A

事例B ①最初、先生から「分割線と彩色時に自分の気持ちや相手の気持ちを考えながらする」という説明があったので、緊張しながら丁寧に取り組んだ。説明なしで実施した時とは仕上がりが違っていたと思う。話したことがない相手だったので、大胆に線を引かない方がいいかなと考えたり、わざと面白くした方がよいかなどと気持ちが揺らいだ。相手が線を引くときはドキドキした。単純な作業だったけど、今日初めて話をする相手だったのでやはり緊張して慎重になった。自分の気持ちをしっかり確認しつつ、相手を知っていくためにはこんな作業も大切なんだと実感した。B②私は、相手が引いた線に合わせて考えながら引きました。2人とも筆圧が強くクレヨンの粉がついてしまった。初めはただ線を引く、色を塗るだけの作業と思っていたけれど、その中で相手が気を遣っているのが感じられて不思議でした。



事例B

事例C①相手がいろいろ考えて線を引いている感じがした。私は、相手が私の線に沿うように線を引いたら全く違う場所に線を引き、相手が私の線に関係なく引いたら、その線に対して左右対称に線を引いたりして、ひねくれものの自分を感じた。彩色は好きな色を使った。相手は似た色で近くを塗ってくれた。色や場所は特に考えなかったけれど広い場所は面倒だから狭い場所を選んだ。相手の塗り方は枠を縁取りして中は不規則にいろいろな方向で塗っていた。見ていて面白かったが、私は塗り方を変えず、自分の塗り方にこだわっている自分がいた。C②最初は相手にできるだけ合わせた。特に彩色は相手が塗った隣に同じ系統の色で塗っていたが、飽きてきて変わったことをしたくなり、赤の隣に赤を塗り、白や黒も使った。



事例C

事例D①最初に真ん中に横線を引きました。縦線は自分と相手の領域を作ってしまうように感じたからです（横並びで作業：筆者注）。相手と違う動きをしようと考え、曲線を引いてみたりしました。話をしない分やりにくさを感じました。話したことの無い相手だったため、自由にできず相手の動きを気にしてしまいました。色は不規則に塗りました。途中で相手が塗った隣を塗りましたが、相手が関係ないところを塗ったので、また不規則に塗りました。相手は小さい枠を選んで塗っているようで、結局自分が大きい枠を塗っていたように思います。仲の良い友人が相手なら違う作品になったと思います。完成しても、もやもやしていて、相手と仲良くなれた感じはしませんでした。人間関係が表されとても興味深いものでした。D②先に相手が横等分で分割線を引いたので、私はあえて等分でない所で線を引いた。途中から相手が曲線を引いたが、私は直線しか引かなくて決めていたので直線しか引かなかった。相手は縁取りをしてから色塗りをしたけど、私は相手とは違うことをしようと思っていたので縁取りはしなかった。場所も相手側自分側に関係なく小さい枠を選んで塗った。



事例D

教育上の課題

A～Dの事例から学生たちが自己理解・他者理解・関係性理解を意識して作業している様子がわかる。事例A①は相手との関係性で自分の行動が左右されていること、他者理解の記述はあるが、自分の気持ちや自己理解の記述は乏しい。A②の記述は短い、相互交渉での自己理解がそれなりになされており、筆者としては学生たちがA②のような記述してくれることを願って授業を展開している。事例Bは①②ともに自己理解・他

者理解の大切さは意識されているが、自分の気持ちを中心の記述であり、抽象的記述に留まる。学生たちの感想に見られる「大切だとわかりました」「理解しました」という抽象論の記述を自身の具体的体験をもって語るように促したいと考えている。事例C①は、相手の動きを意識した記述の中で自分の気持ちの変化を捉えているが、関係性理解・自己理解が中心である。C②は自分の記述だけである。この作業では自己理解が出発点になるが、自分の気持ちの記述だけではなく、相手や関係性への視点をもってもらうよう教示の工夫がさらに必要と考える。事例D①は、相手の動きを意識して作業しようとしている。D②はD①の動きに気付いているが、自分流を貫いている。それがD①には相互交流としては感じられず、もやもや感が残っている。筆者は、D②のような学生に自分流を貫くと相手に相互交流の心地よさを与えないことを自ら気付いてもらいたいと願い、事後に架空事例等で紹介をしたりしてきた。

保育・教育は、自分（保育者・教員）と相手（子ども）との関係性の中で成り立っていることを学生たちに理解してもらうこと、そのためにも、自分と相手の心の動きを丁寧に感じとりながら両者の関係性を理解する体験を授業の中で工夫することが、常に意識している筆者の教育上の課題である。

注1：枠づけ法とは、中井（1974）によって考案された画用紙の縁近くに枠を描いてから描画を行う技法であり、中井によると枠は描き手の心的表出を保護し解放する側面と、表出を制限し拘束するという二重性があるのではないかとされている。

引用文献

- ・中里均（1978）交互色彩分割法—その手技から精神医療における位置づけまで— 芸術療法 9 17-24
- ・小嶋玲子（2006）交互色彩分割法の学校臨床場面での適用—「やりとり」と「自由度」に注目して— 心理臨床学研究 24(3) 335-346
- ・三宅理子（2009）交互色彩分割法の活用の可能性—教員養成課程におけるカウンセリング実習への適用から— 島根大学教育臨床総合研究 8 101-112
- ・梶原律子（2016）看護学生の傾聴体験授業への描画法導入の検討：交互色彩分割法を用いた人間関係論の授業 九州産業大学大学院臨床心理センター臨床心理学論集 11 3-8
- ・小嶋玲子・河内晴美（2017a）保育者養成大学でのコミュニケーション力の向上と他者理解をめざした座席指定の効果 保育者養成研究 1 1-11
- ・小嶋玲子・河内晴美（2017b）教員・保育者養成女子大学の授業での座席指定方法の工夫による効果—学生の座席選択行動の要因と指定座席に対する意識調査を踏まえて— 日本学校心理学会年報 9 49-60
- ・中井久夫（1974）枠づけ法覚え書 芸術療法, 5, 15-19



3歳未満の時期における子どもどうしの関係性

小川 絢子（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：3歳未満児保育、子どもどうしの関わり、友だちとの遊び

1 問題意識と目的

本研究では、3歳未満の時期における子どもどうしの関わりについて検討する。3歳未満児とは、0歳、1歳、2歳の子どもを指す。3歳未満児保育について、菱谷（2006）は、「他の子どもに目を向けさせ、子ども同士の関わりを作り、相互に共感し合う中で、一人ひとりの子どもの意欲を育て、成長への自主的な力を養っていくこともたいせつである。」と述べ、保育者との信頼関係の成立と同様に、子どもどうしの関わり合いが、仲間への共感や意欲を育むことを強調している。

3歳未満児保育および乳児保育の意義について、養育者や保育者との愛着形成の観点から論じた研究は多数存在するが、3歳未満児の保育において、子どもどうしの関わりに関する意義やその関係性を具体的に検討したものは少ない。

本研究の目的は、3歳未満児保育における子どもどうしの関わりについて、文献および保育者からの報告をもとに考察し、3歳未満の子どもの発達や日々の生活にどのような意義を持つかを明らかにすることである。

2 文献における0・1・2歳児の時期の関わり

表1は、乳児保育研究会（2018）を参考に0歳児、1歳児、2歳児のそれぞれの時期における子どもどうしの関わりをまとめたものである。

表1からは、0歳児であっても友だちを模倣する姿が見られるようになり、興味を持って関わろうとする姿が動作として現れてくることが明らかになった。また、1歳児においては、友だちと同じ動作をすることや模倣することが増え、友だちと一緒に嬉しい、楽しいといった感情体験が増える一方で、物や場所の取り合いが増えることがわかった。さらに2歳児にお

表1. 年齢ごとの友だちとの遊びおよび関係性の特徴

年齢	友だちとの遊び	友だちとの関係性
0歳児	友だちをじっと見る、触るなどの関心を向ける 友だちの動作をまねする	友だちが楽しそうにしていることに目を向けたり、そばに行つて模倣を楽しむ。同じことをして、顔を見合わせ笑い合う。友だちに興味を持ち、触りに行ったりする。時に関わり方がわからず、叩いたり、引っ張ったりしてしまう姿もある。
1歳児	追いかけてくれば遊び、いないないばあ遊びなど大人としていた遊びを友だちとする姿が現れる	友だちと同じことをしたくなり、玩具などを取り合ったり、かみつきのトラブルが増える。友だちの動作の模倣、同じ行為をすることで、「友だちと同じである」という喜びを感じる。
2歳児	つものある追いかけて遊び 友だちとの見立て・つもの遊び、ごっこ遊び 絵本・玩具などを共有して遊ぶ	遊びを通して、友だちに共感する。 友だちを遊びに誘う。 友だちをなくさめたり、思いやる行動が現れる。 友だちとの自己主張のぶつかり合いをする。

いては、子どもから遊びに友だちを誘うという関わりが増え、友だちとのごっこ遊びや絵本を共有して読むなどの遊びの共有も増加することが明らかとなった。友だちに対する親しみや、遊びの中で友だちに関わる喜びや楽しさが1歳児よりもさらに増すことが示唆された。

3 調査の方法と結果

1) 方法：対象者は、20××年12月に3歳未満児保育に関する研修会に参加した保育者40名であった。研修会にて調査票を配布し、研修会の終わりに回収を行った。調査票に書かれた調査の目的及び回答が任意であること、情報の取り扱いを口頭で読み上げ、協力を依頼した。

調査票における質問は、以下の2点であった。①現在の担当クラスについて年齢の記入またはフリー・その他の選択及び記入を求めた。②年度当初から現在までの間の担当クラスの子どもの関わりをのなかで、特に変化があったと思うことや、現在子どもどうしが生活やあそびの中でどのように関わり合っているかについて自由記述を求めた。

2) 結果：①回答者の担当クラス及び役割は以下の通りであった。0歳児クラス：3名、0・1歳児混合クラス：5名、1歳児クラス：15名、2歳児クラス：13名（うち1歳児高月齢との混合クラス1名）、フリー及びその他：4名。

②計53回答を収集することができた。回答における子どもの年齢は、0、1歳児：26回答、2歳児：27回答となった。子どもどうしの関わりについて回答の中の類似点からカテゴリを抽出し結果の整理を行った。以下で回答例を示し、整理において使用したカテゴリを挙げ、子どもの年齢ごとにカテゴリの出現数をカウントし、フィッシャーの正確確率検定による分布の偏りを検討した（表2）。

・0、1歳児 回答例

該当カテゴリ：身体的な動きかけ／言語的な動きかけ／遊びの中の対立

年度当初は、友だちの顔にさわってみようという程度でしたが、1歳を迎える子たちが増えてくると、友だちと追いかけて一緒に笑ったり、手を繋いで一緒に歩こうとしてみたり、後ろから抱きついてみたりするようになってきました。

使ってるおもちゃが欲しくなると取りに行ったり、場所を使いたく友だちを押したりすることもあります。

最近は友だちの名前をあいまいな発語ですが、言えるようになってきました。

表2. 保育者からの報告における子どもどうしの関わりに関するカテゴリの出現数

カテゴリ	内容	0,1歳児(26回答) における出現数	2歳児(27回答) における出現数	有意差(0,1歳児 と2歳児の比較)
模倣する関わり	友だちの動作やセリフを模倣する(まねする、同じ行動をする)もの	6	3	n.s.
身体的働きかけ	相手の顔に触る、手をつなぐ、抱きつくなどの身体の動作によって関わるもの(模倣を除く)	8	1	p<.05*
言語的働きかけ	名前を呼ぶ、「かして」「いやよ」「一緒に~しよう」「〇〇くん好き」などの言葉でやりとりするもの(模倣を除く)	10	19	p<.05*
友だちに~してあげる関わり	身の回りのお世話をする、教える、見せてあげる、頭をなでてあげるなどの関わりのあるもの	8	7	n.s.
遊びの中の共有	物や場所の貸し借り、一つの物を一緒に使うなどの関わり	6	13	p<.10+
遊びの中の対立	物や場所の取り合い、競争する、かみつきの手が出るなどの関わり	10	6	n.s.

・2歳児 回答例

該当カテゴリ：友だちに~してあげる関わり／言語的な働きかけ／遊びの中の共有

絵本の読み聞かせ中、隣の子とトラブルになり泣いてしまった子がいた。その子の周りに子どもがたくさん集まり、みんなで頭をなでてあげていた。そのような相手を思いやる姿が増えてきている。

友だちを自ら誘って遊ぶことが増えた。「〇〇あそぼ」という間にか呼び捨てで、仲良さそうに誘ったり、「これは〇〇ちゃんのだから」と友だちの分のおもちゃを取っておくことがあったりするようになった。

4 調査の考察

1) 模倣する関わり：友だちの動作やセリフを模倣する姿は0歳児クラス後半期の頃より見られ、1歳児クラスの年間での変化として記述されることが多かった。

2) 身体的・言語的働きかけ：0歳児クラスの時期から、相手に触る、抱きつく、手をつなぐなどの身体的な働きかけは多く、友だちへの関心の現れとしての身体接触があることがわかった。一方、言語的な働きかけは0,1歳児よりも2歳児において多いことが明らかになった。遊びに誘うことやごっこ遊びの中のセリフ、物の貸し借りにおいて、言葉によるやり取りが増えることがわかった。

3) 遊びの中の共有及び対立：遊びの中の対立においては年齢による差はみられなかったが、物や場所の貸し借り、一つの物を一緒に使うといった遊びの中の共有は、2歳児において多くなる傾向がみられた。2歳児においては「自分のもの」と「他者のもの」という意識がはっきりとしてくる時期であり、共に遊ぶ経験の中で、一つの物を一緒に使ったり、貸し借りをすることが、友だちへの親しみを感じたり、遊びを共有する喜びを

感じたりする機会となっていくことが示唆された。

4) 友だちに~してあげる関わり：先行研究の中では、なくさめるや思いやるといった行動が2歳児の特徴として現れていたが、保育者からの報告では、より低年齢の子どもに見られると保育者が認知していることが明らかになった。

5 全体のまとめと今後の課題

0,1,2歳児の時期であっても、子どもどうしが多様な関わりを行っていること、年齢が上がるに従って遊びの中の物や場所の共有、物の貸し借り等が増え、言葉でのやり取りを楽しむという特徴を明らかにすることができた。こうした変化は、3歳未満児の保育においてクラスのなかで同じ子どもが日々顔を合わせ、あそびや生活を共にする経験が重要であり、その中で友だちへの親しみを深め、友だちへの共感的な視点や行動が増加することにつながっていることを示唆するものである。

今後の課題としては、2歳児においてごっこ遊びに関する報告が多く見られたが、子どもどうしの関係性という視点では十分に分析することができなかつたため、今後具体的に検討していく必要があるだろう。

文献

- ・菱谷信子(2006)「3歳未満児保育」,保育小事典,保育小事典編集委員会(編),戸内健夫・金田利子・茂木彦彦(監修),p118.大月書店.
- ・乳児保育研究会(2018)「資料でわかる乳児の保育新時代改訂5版」乳児保育研究会(編),ひとなる書房.



関係性の中で育つ子ども

伊藤茂美（桜花学園大学 保育学科）
キーワード：子ども・保育者・保護者

1 子どもを取り巻く関係性

子どもは、入園と同時に家族から離れて初めての園で、初めて出会う保育者と過ごしていきます。徐々に、園には面白そうな遊具等があること、家族以外にも甘えられる保育者がいることを感じ、安心して自分のありのままを表しながら興味を持ったことで思う存分遊び園生活を送っていくようになります。ここに、子どもと保育者の関係が出来ていきます。

保育者との関係から次は、子どもと子どもの関係に移っていきます。子どもは、園で自分と同じように過ごす友達が周りにいることに気付き、友達と一緒に遊んだり生活したりして関わっていきます。自分のことを分かってくれる保育者を頼りに、友達と遊んだり生活したりする楽しさを感じていきます。こうして、子どもと子どもの関係へと広がっていきます。

友達と関わり一緒に遊ぶ中で、子どもは楽しさをたくさん感じます。しかし、そうではない感情も様々に味わいます。悲しい・怒れる・悔しいなどです。そうしたときは、保育者にその気持ちを分かってもらいながら、今度はその気持ちを相手に伝えることを学んでいきます。その中で、相手の気持ちに気付き、自分はどうしたらよいかを考える場面にも遭遇します。自分の気持ちと相手の気持ちとの間で大いに心が揺れ動きます。両者の間で心が揺れ動くこの経験がとても大事ですから、保育者は、子どもが自分で心の揺れをどう収めるかを待ちます。保育者は、子どもが自分で心の揺れをどう収めたかを把握し認めたり、収め方によってはもう少し時間をかけたりします。子どもが自分で考え判断することが大事ですから、十分な時間が必要です。そこには、自分を分かってくれる保育者の存在と、大好きな友達の存在、友達との楽しい遊びがあることが支えになります。時間をかけて自分で考え判断し再び友達の中に戻っていった際には、前以上に友達とのつながりが出来ています。この友達とのつながりの中で、子どもは、友達と考えを出し合い遊びが楽しくなっていくことを実感し、自信や意欲をもち、達成感や充実感を味わっていくようになります。友達とのつながりが強くなり、心を通わせていきます。

このようになる過程には、常に保育者が子どもを支えています。保育者が、きっかけを作ったり後押しをしたり、遊びがもっと楽しくなるように子どもと一緒に考えたりしています。保育者の支えがあるからこそ、子どもは、様々な状況にぶつかっても自分で乗り越えていくことができます。

また、こうした園での子どもの傍らでは、家庭で保護者が支えてくださっています。子どもと保護者の関係です。そのためには、保育者は、子どもの様子をこまめに保護者に伝え、保護者も保育者と同じ気持ちで子どもと接しられるよう、常に保護者と情報を共有していることが大事です。保育者と保護者の関係です。

保育者と保護者が一緒に子育てです。この思いが共有できると、保育者と保護者の信頼関係が強まり、互いに安心して子どもと関わることができます。子どもと保育者と保護者の関係です。

安心感を持った保護者は、園の中で他の保護者と積極的に関わるようになり、保護者同士のつながりを深め、ますます元気になります。保護者と保護者の関係です。このような保護者の元気な姿は、子どもの心にも安心感を与え、子どもも元気になります。

こうして、園の中で子どもは、子どもと保育者から、子どもと子どもへ、子どもと保護者へ、保育者と保護者へ、子どもと保育者と保護者へ、保護者と保護者へと広がっていく関係性の中で育っていきます。さらに、園の外へと関係を広げていきます。

まさに、子ども・保育者・保護者、この関係性の中で子どもは育つことを、幼稚園での在職中、私は実感しました。

2 子どもと保育者の関係（事例）

【3歳児4月入園当初】

A児 「ママ、ママ、ママ」

泣いていてなかなか保育室へ入れない。

保育者「ママがいいよね、ママが来る門のところへ行ってみようか」

A児 「ママ、ママ（うなずく）」

保育者はA児を抱いて門へ行く。抱かれたA児の体は固く緊張している。

保育者「Aちゃんのママ、どっちから来るかな。あっちかな」
A児を抱いて左の方を指さした。

A児 「ママ、ママ（うん）」と首を横に振る。

保育者「じゃあ、こっちかな」と右の方を指さす。

A児 「ママ、ママ（うん）」と首を縦に振る。

保育者「そうか。こっちから、もう来るかな」

A児 「ママね、じてんしゃなの。くろいの」

保育者「ママのじてんしゃ、くろいのね。ママ、はやくきて！」

Aちゃんが待ってます」

保育者は、右の方を見て呼んでみる。

A児「ママ、はやくきて」と同じように呼ぶ。

A児は保育者に身を委ね、保育者の首を両腕でぎゅっと抱きしめてきた。

よく見られる入園間もない頃の登園後の様子です。保育者は「A児が、なかなか保育者や園に安心できていないことが心配でしたが、このぎゅっとしてきたA児の両腕と体の感覚を実感して、もう大丈夫かなと思えました」と話していました。保育者とA児の関係が、ここから始まっていることを感じました。

3 子どもと子どもの関係（事例）

【5歳児10月】

虫が大好きで、一日中園庭で虫を探して捕まえて遊ぶA児B児がいる。園中のどこにどんな虫がいるかをよく知っていて、「虫捕り名人の年長さん」とみんなから呼ばれている。今日は、あいにくの雨のため、保育室で遊ぶことを探している。

A児「虫作って遊ぼう。空き箱とかで作ればいいね」

B児「そうだね。カブトムシとクワガタを作ろうか」

A児「いいね。どの箱にする」

A児B児は、一緒に材料を探してそれぞれの虫を作り、出来上がると虫を連れて散歩に行ったり、段ボールで飼育ケースの家を作ったりして遊んでいた。



様子を見ていたC児D児E児も、虫を作って遊び始めた。

C児「トンボにしようかな」

D児「カタツムリにしよう」

E児「たまごもつくろう」

片付けになり、それぞれの虫の飼育ケースの家が一か所に集まると、子どもたちは「虫の展示館なってる」「本当だ、虫の展示館だ」と集まった飼育ケースを見て、喜んでいました。

日から、「虫の展示館」ごっこが、この5人で始まり、飼育ケースの並べ方を考えたり、表示や看板を作ったり、お客さんを呼んで虫を見てもらったりする遊びに広がっていった。



このような5歳児の姿は、興味をもったことで思う存分遊んできた経験が、友達と考えを出し合い共通の遊びとなりつながりを深めていった姿だと思います。子どもと子どもの関係になっていることが分かります。



4 子どもと保育者と保護者の関係（事例）

普段の送り迎え等に限らず、保育参加、行事参加、有志サークル等で、保護者が積極的に保育に参加する機会をつくるなど、園全体で保護者との関係づくりを進めることも効果的でした。保護者が保育に参加して遊びの楽しさを実感したり、我が子や他の子どもと触れ合ったりすることで、子どもに対する愛おしさが増し、子育てをする喜びを感じているようでした。

こうした中で、子ども理解も深まります。保育者への信頼も深まります。子どもにとっても、周りの大人が自分に心を寄せてくれる温かい気持ちを感じることで心の安定がもたらされます。子どもと保育者と保護者の関係となっています。さらに、保護者同士もつながり、お互いに相談したり喜び合ったりして、元気になります。安心して子育てができます。

様々な人との関係性の中で、子どもは育ちます。関係性を大事に、みんなで子育てをしたいと思えます。



子どもの心と体を育むわらべうた ～発達支援の視点からとらえたわらべうたの実践～

山下直樹（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：わらべうた、気になる子ども、発達支援

1 問題意識と目的

世界はインクルーシブな社会に向けて進んでいる。日本の保育現場においても、障害者の権利に関する条約に基づいて「インクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要」¹⁾があると述べられているように、インクルーシブ保育が着実に進められつつある。

「障がいのある子どもと障がいのない子ども」という二元論的に言われてきた統合保育から、インクルーシブ保育への転換により、何らかの「障がい」の診断を持つ子どもだけでなく、さまざまな特徴や困難を持つ子どもに対して合理的配慮に基づいた適切な支援の提供が保障されることとなった。

一方で、発達障がいを中心とした「障がい」のある子どもや、診断を持たないが様々な困難を持つ子ども（以下、気になる子ども、と記す）への支援が進んでいるかという課題も多い。それは同じ診断名だとしても、成育歴や環境により対応に違いが生じる個別性の問題や、乳幼児期には診断がつきにくく、保護者の子ども受容が進まず専門機関につながりにくいことなどが背景として考えられる。

本稿では、発達に偏りがあり、さまざまな感覚がアンバランスである子どもを「気になる子ども」とし、感覚をバランスよく育てていく方法としてわらべうたを紹介した保育者への研修をもとに報告をする。

2 4つの感覚から子どもの困難を理解する

気になる子どもの定義はさまざまであるが、本稿の定義である「感覚がアンバランスである」とは、以下に示す4つの感覚がアンバランスであり、また未成熟であることをいう。

ルドルフ・シュタイナーの感覚論によると、幼児期に大切であるのは、「触覚」「生命感覚」「運動感覚」「平衡感覚」の4つであり、これらは体と深く結びついており乳幼児期に育てる必要のある感覚であるという²⁾。

触覚には、「保護する働き」、「識別する働き」、「安心・信頼を育む働き」という3つの働きがある。その中でも、「安心・信頼を育む働き」は、ふれあいによる養育者との愛着形成をうながすため大切である。肌がふれあうことによりオキシトシン（愛情ホルモンまたは、絆ホルモンと呼ばれる）の分泌

が促され、愛着の形成が促進される³⁾。

生命感覚は、「食べる・寝る・あそぶ（日中の活動）」を中心とした生活リズムをつくることで、自律神経を整える働きがある。生命感覚は、人間の体が健康か、不健康かを教えてくれる感覚であると言い換えられる。空腹時や身体的な不具合が生じたときに、痛みや身体的な不調で知らせてくれるのが生命感覚であるという。生命感覚にトラブルが生じると、「食べる・寝る・あそぶ」の生活リズムへの支障が生じる。特に食欲の不振や不眠・過眠など睡眠に関するトラブルは生活への支障が大きい。

運動感覚には、「自分の身体の部位同士がどんな位置関係にあるかを教えてくれる働き」、「姿勢を保持し、筋肉を微調整する働き」、「自分の体の大きさを知る働き」の3つの働きがある。運動感覚にトラブルが生じると身体の各部位を協調させて動かすことができないため、あらゆる運動が苦手になる。また、日常生活では、乱暴でだらしのない行動が見られるようになる。保育現場でみられる乱暴な行動やだらしのない行動は、この運動感覚の未成熟から生じることが多い。

平衡感覚は、体の傾き、回転、前後上下左右の動きを感じ取る感覚である。平衡感覚にトラブルが生じると、日常生活に様々な支障が生じる。例えば、ひとりでクルクルと回る、ぴょんぴょん飛び跳ねる、じっとしてられない、走り回る、高い所に登るなどである。

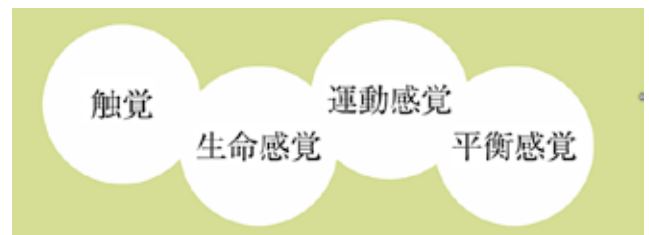


図1 4つの感覚 「気になる子」のわらべうたより

3 わらべうたと発達支援

現代は、感覚を育てることが難しい時代である。コロナ禍以前から大人と子どもとのふれあいが減り、コロナ禍では近づくことさえ控える必要がある社会になりつつある。また大人の夜型の生活リズムにより子どもの睡眠も乱れているという。運動感覚、平衡感覚に至っては、「便利な社会」にあって子どもはからだを動かす必要性がなくなってきている。したがって現代は、感覚を育てることを意識的に行う必要がある

時代になっていると言える。

わらべうたには、上述した4つの感覚を育てる側面がある。触覚では、ふれあいにより養育対象者との愛着形成を促進する。特に乳児と親とのふれあいのわらべうたに代表されるものが多くみられる。朝のうたやおやすみのうた、子守歌、いただきますのうたなど規則正しい睡眠と食事は、生命感覚を育て子どもの生きる力を支える基礎となる。姿勢を維持し、関節や筋肉を意識するわらべうたも多く存在する。また、回転やジャンプ、揺れを伴うわらべうたにより、運動感覚や平衡感覚を育てていくことにつながる。

4 子どもの感覚を育てるわらべうた

4つの感覚を育てるわらべうたは多数存在するが、以下に、感覚の中でも特に触覚を育てるわらべうたを2つ抜粋して掲載する。

<触覚を育てるわらべうた>

昔から子どもは撫でられ、抱っこされて育ってきた。そのことによって安心し大人との関係が安定的に築かれてきたため、触覚を育てるわらべうたは多く存在する。くすぐりあそびはわらべうたの基本であり、子どもはくすぐられることで笑顔になり、大人も笑顔になる。

「東京都日本橋」

東京都 日本橋 がりがりやまの

パン屋さんと つねこさんが

階段のぼって こちょこちょこちょ



図2 「東京都日本橋」 「気になる子」のわらべうた」より

「ぼうずぼうず」

ぼうず ぼうず かわいいときゃ かわいいけど

にくいときゃ ペしよん



図3 「ぼうずぼうず」「気になる子」のわらべうた」より

5 まとめ

保育現場においては、「気になる子ども」への支援に多くの時間と労力を要している。専門機関との連携は大切だが、子どもへの発達支援は、専門機関の専門家による療育だけによるものではない。保育現場における日常的な生活や遊びを通じた発達支援もまた専門機関での療育同様重要である。

本稿では、保育現場で長く実践されてきたわらべうたについて、発達支援という視点からとらえ述べてきた。

筆者は2014年4月から現在に至るまで約7年間、月刊『クーヨン』（クレヨンハウス）誌上で「気になる子のためのわらべうた」というテーマで連載し続けている。そのため「わらべうたと発達支援」に関する保育現場からの研修依頼が多い。研修では、保育現場で感じられる子どもの「気になる」行動を、感覚を育てるという視点からわらべうたを行っている。今後も子どもの心と体を育てるわらべうたが保育現場で広がっていくことを願うとともに、筆者自身、わらべうたの研鑽を積んでいきたいと考えている。

文献

- 1) 文部科学省「共生社会の形成に向けて」2004
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325884.htm（最終閲覧日2021.1.4）
- 2) アルバート・スズマン、石井秀治訳『魂の扉・十二感覚』耕文舎 1996年
- 3) 山口創『皮膚感覚の不思議』講談社 2006年
- 4) 山下直樹『「気になる子」のわらべうた』クレヨンハウス 2018年

冬の講演会

未就学児施設における深刻な結果の予防とコミュニケーション ～新型コロナウイルス感染症のもとで～

心理学博士 保育の安全研究・教育センター 掛札逸美 氏

報告者 桜花学園大学 太田早津美

2020年11月15日(日)、チャイルドエデュケア研究所としては初めてのリモート研修を開催しました。開催にあたり、掛札先生にはZoomの接続テストをはじめ、大変お世話になりました。ご参加いただいた皆様も1時間半の講演があったという間に思われるくらい、画面からの歯切れのよい掛札先生のお話に聞き入ったのではないかと思います。未就学児施設で働く専門家だからこそ、日頃から身に着けておかなばならない危機管理に対する意識と考え方や事故対応について、しっかりご教示いただきました。講演内容の骨子は以下の通りです。

保育の価値とリスクについて



まず最初に、「価値とリスクの天秤」を考えないといけいない。子どもが育つという価値がある以上、リスクは必ずある。私たちが生きている世界に、いいことしかないことはない。いいことがあればリスクがついてくる。子どもの成長発達には価値そのもの。まず、皆さんはそれを高める仕事をしている。

一方、子どもは危なさを知らないから、口に入れる、さわるといふようなことを試してみる。これは悪いことではない。育つために必要なことである。この文化は特に、リスクをゼロにしようとするが、そんなことは不可能。そうではなく、価値とリスクの天秤をどうかけるかという話。たとえば、リスク・マネジメントはビジネスでは当然のこと。ビジネスには必ずリスクがついてまわる。リスク・マネジメントでは、リスクが価値を上回らないよう、でも、価値を上げるためにどの程度のリスクをとるか、決めていかないとはいけない。

たとえば、コロナにいいことはない。しかし、コロナの中で保育園やこども園が開いていたことには大変な価値がある。親は仕事に行くことができ、子どもは集団保育を享受できた。しかし、未就学児の年齢がほとんど重症化しないとわかった

のは7月頃であり、園の先生たちが不安と恐怖の中で開園し続けてきたのも事実。国として未就学児施設を開け続けたのは日本だけで、感染が起これば保育所が責められる。それでも、先生方は価値を保つために、できる限りのことをしてきてくださっている。

怪我をするようなできごとと、結果を分ける

子どもは動くことで育つ。つまり、すべる、転ぶなどの怪我につながる出来事が起きる。だが、この出来事が必ず怪我になるわけではない。ちょっとした段差につまずいても、たいていの人は転びもしない。でも、すり傷をする人も時々おり、骨折する人もたまにはおり、頭を打つ人だって稀にいる。

つまり、出来事と、出来事の結果は違うということ。結果から考えてはいけない。「怪我をさせてしまって申し訳ありません」ではなく、この出来事は保育・教育として良かったのか悪かったのか、この子の発達にあってたのかということを考えるべき。転ぶ、つまずく、すべる、落ちる、ぶつかるといった出来事は体を動かせば当然起きるのだから、その出来事につながった活動が保育・教育の質として適切ならば、決して、「怪我をさせてしまって申し訳ありません。この活動を見直します」などと言っはいけない。

以前は、一方が謝罪すれば他方も謝り返して丸く収めるという文化があった。だが、今は「園が謝っているのだから、園が悪いんだ」と考える保護者もいる。まず、園が「今のこの活動は、保育・教育の質として適切かどうか」を判断できること。職員がその判断を日々できること。これが不可欠である。

情報のフレーミングが大切

「フレーミング」とは、1960年代以降、健康心理学者が使い始めた言葉。同じ情報をポジティブな額縁(フレーム)に入れて伝えるか、ネガティブな額縁に入れて伝えるかで相手の受け取り方がまったく違う。

例えば、「跳び箱の4段がスイスイ跳べているんですよ」という明るい話に、「今日は、手がすべってしまったんです。こういうことは起きますよね」というリスクも入れておく。先生たちはお便りでも連絡帳でも良いこと、出来たことばかりを書きがち。でも、せっかく良いことを伝えるなら、そこに必ず付いてくるリスクも伝える。育ちの価値には必ずリスク

が付いてくるのだから。「跳び箱からは落ちることもある」という話を、子どもが本当に落ちて怪我をした時にしたら？ 暗いネガティブな額縁に入っている情報だから、保護者は受け取らない。「言い訳するんですか？」と、かえって怒りを買いかねない。



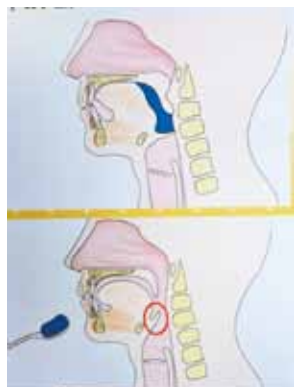
噛みつきやひっかきも同様。人のおもちゃが欲しいという気持ち、遊んでいるおもちゃを渡したくないという気持ちは自我の発達として当然。でも、言葉が出ないから、ひっかきや噛みつきにつながる。だから、「他の子に興味が出てきた」「人のおもちゃに手を出し始めた」、この時点で自我の育ちの価値を明るく、前向きに伝えつつ、かみつきやひっかきが出てくるリスクも伝えておくこと。

誤嚥窒息はどの位置で起きるか？

丸のままの大きなブドウによる誤嚥窒息死があったので、その件に関連して。誤嚥窒息は、目の前で見ていても起き、気づいてすぐに異物除去をしようとしても、除去できないことがある。

息ができない出来事は喉（気道上部）と気管 2 か所で起こる。気管の太さは 2 歳児で約 6mm。ブドウのような大きなものは気管に詰まらない。こうしたものが詰まるのは喉（気道上部）。

白玉団子、こんにゃくゼリー、丸のままのミニトマトやぶどうといった大きさや材質は、特に詰まりやすく、危ない。丸くてつるんとしたものや切り口が円のものは気管にスポッと詰まるので危ない。たとえば、イチゴの形をした



木製のトントンおままごとが 2 歳児の喉にはさまり、意識不明の重体が続いた後、亡くなった事例もある。

では、小さければいいのか？ 小さければ小さいで、気管に詰まる。

不完全閉塞でも脳が損傷を受ける可能性

たとえば、0 歳児で、市販の離乳食の砕いた大豆が気管に入って不完全閉塞（挟まっているが、ほんの少しだけ息ができていた状態）を起こした事例がある。また、幼児で食事中に豆腐のかけらが気管に詰まり、不完全閉塞を起こした事例もある。



不完全閉塞でも低酸素脳症を起こすリスクはある。多少息ができていても、長時間経てば脳には損傷が起こる。人体の中で一番酸素を必要とするのは脳であり、脳に一度損傷が起きると元に戻らない。



○異変に気付いたらすぐに救急車を呼ぶ

呼吸ができていないようだ、チアノーゼを起こしているようだ…、すぐに救急車を呼ぶこと。「アレルギーなのか？」「なにか詰まったのか？」、そんな診断は園にはできないし、診断するのは園の責任ではない。でも、救急対応をしなかったら、対応が遅れたら、責任を問われかねない。そして、とにかく「脳

冬の講演会

を守る」。脳に損傷が起きたら、窒息が解除されて自発呼吸が戻っても元には戻らない。

そして、食物で「詰まらないもの」はないのだから、まず、「嚥下咀嚼が育つ過程にある子どもたちは、いつ、喉や気管に詰まってもおかしくない」としておく。特に、急に泣き出すことのある0歳児、1歳児。急に泣き出すとは、大きく息を吸い込むこと。この子どもたちが離乳食を食べだせば、咀嚼も嚥下も舌の動きも未発達なので、ただでさえ、誤嚥のリスクは上がる。そこで急に泣き出せば、詰まる確率は上がってしまう。他にも、大きく笑っている時、歩き回っている時、驚いた時などは急に大きく息を吸い込む危険が高く、これは幼児も同様である。

安全と安心と責任は違う

安全と安心は違う。安全は具体的に環境を変え、人間が行動すること。安心は、その人がその状況に対してどう感じるか。一方、責任も別。責任は仕事として、専門家として、すべきことの範囲。睡眠時の安全確保など、他人の子どもの命を仕事として預かっている以上、すべき責任がある一方、負えない責任を負わないという視点も重要。

例えば昨年5月に大津市で起きた交通事故。車が運転を誤って飛び込んできた事故を、歩いている側が防ぐことはできない。責任は負えない。コロナも同じで、飛沫・空気感染するものを100%予防するとは言えない。言うてはいけない。出来ないことは「ここまではするけれど、ここからは出来ない」と言うしかない。保育・教育についても同じで、たとえば入園時に、重要事項説明書や園のしおりに明記して、渡しておくことが不可欠となる。

保育の価値とコロナのリスクの天秤

読啓をするヨーロッパの聴覚障がい者の人たちが春先、手作りし始めたマスクを参考に、呉服店と共同で口元が見える布マスクを作った園長先生がいる。

保育者はマスクを着用しているが、大人の口元が見えない状況は子どもの発達に支障をきたすリスクが高いと考えられる。

今の0、1歳児は大人（保育者）の口元や表情が見えない状態ですすでに1年近くを過ごしている。この1年は子どもにとって大きな損失になると思う。感染に対する保育者の不安

を少しでも軽くすることと、子どもの発達のバランスをどうとるかも考えなければならない。



コロナ禍における保育実践

コロナ禍の中の保育で、活動をどうすればいいか、今まで通りでいいのかという質問を受ける。保育者は子どもたちを守るためにさまざまな我慢をしているし、子どもたちは保護者の判断で登園してきているのだから、保育者と子どもたちは「運命共同体」として活動も行事もこれまで通り、実施すべきだと3月から伝えてきた。そこに、保護者を入れるかどうかだけが問題。オンライン配信を使って、保護者に行事や日々の活動を伝え始めた園もずいぶんある。オンライン配信は、コロナの結果として得られたプラス面であると思う。

新型コロナウイルス感染症自体にいいことはひとつもない。けれども、たとえばテレワークが多少でも広がって、都市の人口集中が変わるなら、未就学児施設にとっても子どもの育ちにとってもプラスになるかもしれない。保護者を入れずに行事をしてみた結果、自分たちがしてきた行事の価値を考え直している園もある。オンライン配信を保育参観や保護者会に使っている園も増えてきた。コロナは悪いことばかりと考えるのではなく、プラスの部分もあると考えつつ、終息を目指していければと思う。

講演後に多くの方々から、先生への感謝を込めた感想をお寄せいただきましたが、紙面の都合上その一部を掲載させていただきます。

参加者 アンケート (抜粋)

講演内容

- 安全と安心と責任を明確に考え、分けることを学べた点が良かった。
- 掛札先生は、大切なことを繰り返していただいたり、詳しいことのリンク先を知らせてくださったりと、丁寧でありながらもテンポ良くとても聴きやすい講演でした。保育園は十分に頑張っているとエールをいただいたようなきもちになり、嬉しかったです。
- 貴重な話を聞けてとてもよかったです。保育への考え方の姿勢がわかりました。これからも頑張っていこうとゆう気持ちになりました。
- 価値とリスクの天秤、できないことはできないと言う、私たちは他人の子どもを仕事として預かっているプロなど、保育の中での大切なことや改めて考えるべきことを沢山お話していただき、大変勉強になりました。
- 目の前で先生がお話ししてくださっているような感覚だったのと、人を惹きつけるお話のしかた、また興味深い話の内容で、あっという間の90分でした。
- フレーミングの話が印象的でした。いつもリスクの話をしておかなくてはと思い、年度の初めの懇談会などで話していますが、日ごろから毎日のエピソードの中でしておくべきことなのですね。いざ怪我などが起こった時に、保育園では起こりやすいことだと説明をしては、言い訳と受け止められはしないかと思ってしまい、結果、謝って済ましてしまっていることに気づきました。
- できないことはできない！と保護者へ伝えていくことができれば...と思うけれど、なかなか難しい現場の状況もあります。しかし、保護者へリスクがあることを伝えていくことの必要性は感じました。先生がおっしゃっていたように、できたことばかりを伝えるのではなく、子どもが葛藤していることなども、普段から伝えていくことを意識したいです。
- 価値とリスクについて 改めて考えるきっかけになった。怪我についての考え方を反省しました
- コロナウイルス感染については、本当にストレスになっていること。消毒など業務が更に増えたことに加え、ソーシャルディスタンスを保つ為に、保育士が足りていないままの日常の保育。その点についても、自分の力で何とかしようと思ってしまう保育士の質。頷くことが多く、気持ちが楽になりました。必要なことは声に出し、役割は果たしていくことの重要性を感じました。
- 掛札先生の講義をととても、面白く、わかりやすく、時間がとても短く感じました。ありがとうございました。コロナに感染してはいけないというプレッシャーで、疲弊していた気持ちが軽くなりました。身近に感染が起こった時の対応の仕方が大変参考になりましたし、感染は、悪ではないを、職員で共有します！
- とても分かりやすい講演でした。考え方を変えなくてはと思うところも多かったです。勉強になりました。
- 保育士が陥りそうな考え方をそれは違うと言ってくれてスッキリした。上司と共にこれからのことを考え発信していきたい。また保護者対応の具体的な言葉がもらえ、すぐにやってみたい。
- タイムリーな内容と、保育者がどこまで責任を負うべきか、なんでも請け合えずたことの代償など、とても興味深いお話でした
- できないことははっきりとできないと言うこと、保護者にもリスクあることを初めに伝えておくことなど、これまでの自分の行動を見直しながら聴かせていただきました。明日からの保育にも繋げていきたいと思います。
- コロナの中頑張っていた心に染みました。また、掛札先生の研修はいつ聞いても刺激的で今を見直せます。ありがとうございました
- 掛札先生の資料等でもっと情報を取り入れて生かして行きたいと、今後の意欲にも繋がりました。ありがとうございました

リモート研修について

- Zoom開催は、会場へ行くよりも負担が無くて良かった
- リモートということで、掛札先生に1対1で講義をしていただいているようで、とても良かったです。
- Zoomは初体験でしたが、練習日を作ってくださいたり、時間前から丁寧にミュートのやり方を教えてくださいいただき、スムーズに参加することができました。
- ズームの研修の良さもたくさん感じました。
- Zoomでの経験もとてもためになった。
- 昨年までは、定員がいっぱいで申し込みすらできませんでしたが、今回オンラインということで多数の参加が可能になり、私も申し込むことができました。オンライン研修、有難いです。

学生の学びの場としての子育て支援室「さくらんぼ」

高須裕美（名古屋短期大学 保育科）・堀由里（桜花学園大学 保育学科）

子育て支援室「さくらんぼ」は、授業の一環としてゼミ活動で遊びを披露したり、授業の空き時間に保育補助としてボランティアしたりする実践の場を提供しています。今年度は、新型コロナウイルス感染症の流行および感染予防のため、利用される親子の人数制限と同時に、学生の利用を禁止することとしました。

ここでは、昨年度（2019年度）の学生利用に関して、報告いたします。尚、新型コロナウイルス感染症により昨年度3月は「さくらんぼ」を閉室としておりましたので、データは4月から2月までになります。

ゼミ活動での利用状況

桜大では、1年生のゼミ活動で、15名程度の学生が親子の自由遊び空間に入り、一緒に遊び、お子さんの様子を観察させていただきました。2年生のゼミ活動では、10名程度の学生が、事前に遊びを考案・練習し、当日お子さんの前で披露しました。3年生は学外の子育て支援室に行き、ゼミ活動を行っています。4年生のゼミ活動はオペレッタを研究・実演するゼミにおいてのみ「さくらんぼ」を利用しています。

名短1年生は、1年生のゼミ活動において、観察と実践が経験できる場として活用させて頂いています。保育士免許を持つ専攻科保育専攻の学生は、キャンパス内のさつまいも栽培（植え付けと収穫）や体育館での運動遊び、付属幼稚園のホールでの音楽劇などの実践活動に、支援室の親子をキャンパスの様々な場所へ招待する形で授業実践を充実させてきました。

桜大2年生と名短1年生の披露した出し物を表1にまとめました。多くのゼミで取り入れられていたものとして「手遊び」があげられます。手遊びは、リズム感も育ち、歌いながら動くことで、歌詞の意味や、物語をイメージすることがで

きます。児島は、手遊びを「手や指や全身の動作を伴う遊びの要素をもった歌」¹⁾であり、小川は「リズムの共有」²⁾であるとも述べており、活動前に集中させたり、隙間時間を埋めたりするようなものではなく、「個と集団が育ち合うための基盤である」³⁾と述べています。学生が取り組んだ出し物には、ふれあい遊びや身体遊び等、音楽を伴う遊びが挙げられており、親子が集団と遊びを共有する手段になります。その他、出し物には絵本や劇など児童文化財を用いた物も見られました。これらも、子ども達の想像力を育てるとともに、親子で鑑賞することにより、親子のコミュニケーションを更に深めることができると考えられます。

「さくらんぼ」は、出し物を披露する学生にとっても、保育実技を試行できる貴重な学習の場として、また親子に触れ合いながら、保育者の力量を考える場として機能しています。

子どもとの交流・遊びの披露をしてみた感想

ゼミ活動で「さくらんぼ」を利用した学生423人（桜大1年94人、桜大2年135人、桜大4年9人、名短1年185人）を対象に、自記式のアンケートを実施しました。アンケート内容は、「参加してどのような経験をすることができましたか?」と「参加して得たことは何ですか?」という2つの項目を設定しました。経験に関しては、①小さい子どもと遊ぶ機会がもてた、②親子の関わりをみることができた、③親子の前で出し物をやる機会がもてた、の3つの小項目を、得たことに関しては、①子育て支援の様子が分かった、②自分が将来保育者になるために役立った、③小さな子どもへの関わり方について学ぶことができた、④保護者への対応や関わり方について学ぶことができた、の4つの小項目を設け、5段階評定（5：思う、4：やや思う、3：どちらでもない、2：

表1 披露した出し物

手遊び	・はじまるよ ・むすんでひらいて ・夏の花 ・ゲーとパー ・アンパンマン 等
ふれあい遊び	・バスにのって ・びったんこ ・新聞遊び
絵本/紙芝居	・だるまさんの ・ちびゴリラ 等
劇	・大きなかぶ ・3歳の誕生日（人形劇） ・トンネルくぐり
身体遊び	・アキレスけんタウルス ・アンパンマン体操
その他	・歌遊び ・ペープサート

あまり思わない、1：思わない) で回答を求めました。

その結果、ほとんどの質問項目において得点が高く、子育て支援室において学びがあることを示しています(表2)。桜大1年生に関しては、観察することがメインであったため、出し物の項目では低い得点を示しておりますが、出し物をせずとも、親子の様子や保育士の関わりの様子を見て学べていることがわかります。

表2 ゼミ活動での学生の学び

	どのような経験ができたか			参加して得たこと			
	遊ぶ機会	親子の関わり	出し物	支援の様子	将来	関わり方	保護者対応
桜大4年生	4.4	4.7	4.9	4.6	4.8	4.8	4.8
桜大2年生	4.9	4.9	4.9	4.7	4.9	4.8	4.6
桜大1年生	4.8	4.9	2.7	4.7	4.7	4.6	4.4
名短1年生	4.8	4.9	4.7	4.7	4.8	4.6	4.3
平均	4.7	4.8	4.3	4.7	4.8	4.7	4.5

ボランティア活動での利用状況

2019年4月～2020年2月までの期間に、「さくらんぼ」でのボランティアを実施した学生61人(桜大1年5人、桜大2年36人、桜大3年7人、桜大4年7人、名短1年6人)を対象に、自記式のアンケートを実施しました。アンケート内容は、上述のゼミ活動でのアンケートと同様です。

その結果、「出し物」以外の質問項目において得点が高く、子育て支援室において学びがあることを示しています(表3)。ボランティアは個人で参加しているため、出し物を披露するというよりは、親子の遊びを近くで補助していくということに主眼をおいています。

表3 ボランティアでの学生の学び

	どのような経験ができたか			参加して得たこと			
	遊ぶ機会	親子の関わり	出し物	支援の様子	将来	関わり方	保護者対応
桜大4年生	5.0	4.6	2.7	4.7	5.0	4.4	4.3
桜大3年生	4.9	5.0	3.0	4.9	5.0	5.0	4.6
桜大2年生	4.9	5.0	2.1	4.9	4.9	4.8	4.8
桜大1年生	4.8	5.0	2.2	4.6	4.6	4.6	4.6
名短1年生	5.0	5.0	1.3	4.3	5.0	4.7	4.3
平均	4.9	4.9	2.3	4.7	4.9	4.7	4.5

まとめ

ゼミでの授業利用とボランティア利用の学生では、学びの感覚にはあまり差がないような結果でした。しかし、学生の自由記述データには、乳児期の子どもとの言葉以外でのコミュニケーションが取れた喜びや、一人ひとりの遊びの集中力の違いについて、自由遊びの観察からの気づきが述べられています。これらを詳細に分析することによって、授業を通しての学びとボランティアを通しての学びには質的な差がでてくることも予想されます。今後は更にデータを分析していきたいと考えます。

また、実際に参加されたお子さんの様子、保護者の方の感想などを含めて検討をすることで、より学生の学びも深くなると考えます。コロナが収束し、「さくらんぼ」も利用者の親子と学生の活気ある声が届く日がくることを願っています。

引用文献

- 1) 児嶋輝美(2009) 保育教材としての手遊び歌の現状と課題—データベースの作成を通して— 徳島文理大学研究紀要 第77号 p.81-95.
- 2) 小川博久(2008) 音楽表現における集団と個の関係を問い直す—響き合い、共鳴し合って育つ表現を求めて— 音楽実践ジャーナル6(1) pp.11-15
- 3) 同上



子育て支援室「さくらんぼ」年齢別交流会

「さくらんぼ」では、0歳から3歳までの年齢別交流会を月に何度か開催しています。今回は、それぞれの年齢での交流会の様子をご紹介します。

0歳児交流会

◆当日の参加親子：5組（5か月～1歳過ぎまで）ときょうだい4名

◆遊びの様子

- ・丸くなってお母さんのお膝に抱っこされて座り、お名前を呼んでから、手遊び「ころころたまご」を一緒に楽しみました。
- ・「メリーゴーランドに乗って」の音楽に合わせて、お母さんに抱っこされてぐるぐる走って遊びました。一緒に参加したきょうだいのおにいちゃんおねえちゃんも楽しそうでした。
- ・絵本「かんかんかん」「おはようあさですよ」を先生に読んでいただき、みんなで座って見ました。興味深そうにじっと絵をみつめる姿が見られました。
- ・ふれあい遊び「一本ばしこちょこちょ」「ぞうきん」「ラララだいこん」で、笑顔がいっぱいあふれました。
- ・ペープサート「くまさんといっしょ」をきょうだい共々楽しみました。



保護者の方へのアンケート

Q 参加された感想は？

- ・家では上の子の遊び中心なので、0歳に合った遊びができてよかったです。
- ・いつもお世話になっています。兄弟二人連れていくと、出かけてもてんやわんやですが、ここでは先生方が一緒にみてくださり、安心して私も息抜きをさせてもらいながら参加しています。
 - ・すごく楽しそうにしていたので今後も参加したい。
 - ・小さいなりに他の赤ちゃんに興味を示すようになっていくのが分かって良かったです。



1歳児交流会

◆当日の参加親子：7組

◆遊びの様子

- ・1歳児の交流会では、親子でふれあい遊びをしたり、パネルシアターのクリスマスツリーに飾りをペタペタ貼ったりして楽しみました。



保護者の方へのアンケート

Q 交流会に参加された理由は何ですか？

- ・前回初めて参加してみて子どもが楽しそうにしていたから。
- ・同年齢のお子さんと交流がもてるから。
- ・対面でのイベントが少なく、よい経験になると思ったから。
- ・年齢に合った遊びができるため。
- ・手遊びなどを通して触れ合いをしたかったから。



Q 参加された感想は？

- ・普段なかなか一緒に手遊びなどをしないので、良い機会になりました。
- ・同じくらいの子もたちと過ごせて良い刺激になったと思います。
- ・色々な種類のおもちゃがあり、子どもがどんなものに興味があるのか知るきっかけになりました。
- ・同年齢の子や親さんと話ができよかったです。
- ・対面での読み聞かせの機会は少ないので、ありがたいです。
- ・子どもがいつも楽しんでくれます。
- ・一緒に交流して遊ぶ時間もあり、楽しかったです。
- ・コロナ禍でなかなか遊べる場所がない中、本当に助かっています。ありがとうございます。

2 歳児交流会

◆当日の参加親子：6組

◆遊びの様子

- ・2歳児の交流会では、みんな元気いっぱいにふれあい遊びをしたり、動物になって動き回ったりしました。絵本も読んでもらいました。

保護者の方へのインタビュー

Q 交流会に参加された理由は何ですか？

- ・同年代の子と触れ合えたり、先生に遊んでもらえたりするから。
- ・子どもの遊び場としてよいと思ったから。
- ・同年代の子と触れ合うのによいと思ったから。
- ・入園前にいろいろ経験させたいと思ったから。
- ・子ども同士一緒に遊ばせたかった。また、大人数に慣れてほしいと思ったから。
- ・家だと自分が家事をしてしまい、子どもが一人遊びばかりになってしまうため。
- ・入園前に集団生活や遊びに親んでもらいたいと思っておりますが、この1～2年でお友達と遊ぶことができるようになりました。



Q 参加された感想は？

- ・自分では分からないので、手遊びや体を動かす遊びがあったよかったです。
- ・おもちゃがたくさんあり、保育士さんとの手遊び歌など楽しそうにしていました。私自身も良い気分転換になり、子どもと楽しく遊べてよかったです。
- ・保育士さんがたくさんついてくださっていたので安心して遊べました。
- ・きれいな施設で、安心して遊ばせることができます。
- ・子どもに色々な遊びの経験をさせられるのがとてもよいです。
- ・自由遊び以外にも手遊びなどがあったとても良かったです。また来たいです。

3 歳児交流会

◆当日の参加親子：2組

◆遊びの様子

- ・おはようございますのあいさつをしてお名前を呼んでから、参加のシールはりをしました。
- ・金魚のペープサートを渡してもらい、手に持ってうれしそうです。パネルシアター「うさぎさんがね、お山にのぼったよ」が始まると、興味を持って前に出てきて見えています。「きんぎょさんがね、お山にのぼったよ」の所にくると、手に持った金魚さんのペープサートをパネルシアターのお山に登らせて楽しそうでした。
- ・もう一つのパネルシアター「おむすびころりん」もコロコロころがるおむすびに歓声があがりました。
- ・「ひよこが歩いて」のCDに併せての体操では、元気いっぱいからだを動かして楽しみました。
- ・ふれあい遊び「だいこん1本抜いてきて」では、親子共々笑顔になって、とても楽しそうでした。
- ・紙芝居「かくれんぼ」も興味深そうに見入っていました。



保護者の方へのインタビュー

Q 交流会に参加された理由は何ですか？

- ・子ども同士遊べるといいなと思ったので。
- ・お話会で人の話を聞く練習がしたかったから。
- ・情報交換ができるから。

Q 参加された感想は？

- ・子どもも親も楽しめてリフレッシュできました。
- ・とてもありがたい場所です。子どもも楽しく遊ばせていただき、親もリラックスして楽しみました。



子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー

子育て支援室には対象年齢を決めた交流会と、どの年齢の子も参加できる開放日があります。開放日に支援室に参加された保護者の方々へお子さんの様子や利用された感想などを伺いました。

Q 支援室に来るきっかけは何ですか？

- ・上の子で仲良くなったお母さんに教えていただきました。
- ・知り合いの方が名古屋短期大学の出身で、支援室のことを教えていただきました。
- ・子育てサロンで一緒だった方に紹介していただきました。
- ・ホームページを見て知り、参加しました。
- ・お兄ちゃんやお姉ちゃんの頃から通わせていただいているのですが、先生も変わらずいてくれるので、親としても通いやすいです。
- ・近所のママ友に教えていただきました。
- ・子どもの遊ぶところ、交流できるところを探していたので、人から聞いて行きはじめました。
- ・上の子の時に行っていて良かったため、来ています。
- ・近所にあり、行きやすそうだったから。
- ・同年代の子と遊ばせてあげたくて連れてきています。



Q お子さんはどのような遊びをしていますか？

- ・支援室のテラスがお気に入りです。
- ・手押し車を押ししたり乗ったりすることが好きです。
- ・おままごとが好きです。
- ・手作りの滑り台があるので、そこから車を転がしたりしています。

- ・ミニカーや電車遊びが大好きです。
- ・テラスで乗りものを押ししたりして、自由に遊んでいます。
- ・先生との手遊びを楽しんでいます。
- ・絵本を見たり、キッチンでおままごとをしたりして楽しんでいます。

Q 支援室の良さはどんなところですか？

- ・先生たちが子どもとたくさん遊んでくれるところです。
- ・他の支援センターにも行きますが、断トツでさくらんぼの先生が遊んでくださいます。
- ・たくさんのおもちゃがあり、室内・室外両方あるので、子どもが気分によって遊べるため、遊ばせやすいです。
- ・同年齢のお子さんと遊べるところがいいです。
- ・自分が子どもだけとの時間から解放され、先生や他のママさんなどの大人と話ができて、気分転換ができるところ。
- ・無料で楽しめるところです。



Q 支援室を利用された感想は？

- ・子どもがとても楽しそうで、親も満足です。
- ・家だと体が動かせないけれど、支援室では運動系の遊びもできてよいです。
- ・家庭にはないものがあり、子どもが楽しんで遊んでいました。
- ・2年くらい来ていますが、開放的でよいです。
- ・公園の遊具はまだ無理な年齢のため、支援室で遊べるのは安全でよいです。
- ・顔見知りの人ができたり、先生と話すことで自分自身の気分転換ができ、子どもも色々なおもちゃで遊んだり、手遊びなどもできて楽



しそう。親子共に楽しめて助かっています。

- ・交流会では、手遊びなどをしてもらえるので楽しそうです。
- ・なかなか同年代の子と遊ぶ機会がないので、幼稚園に行く前の準備としては最適だと思いました。
- ・同じ月齢の子どもと遊べたり、他のお母さんと育児の情報交換や悩みを相談できたりするところがよいです。



- ・保育士さんがいろいろなアドバイスや体験談などを話してくれてとても頼りになります。
- ・手遊びや工作など体験できてとてもよい。

Q コロナ禍での子育てで困っていること、大変なことは何ですか？

- ・気軽に遊びに行けないことです。また、友達ともコロナへの不安感が違うため、気軽には遊べません。
- ・自由に今までのように遊ばせてあげられないこと。

- ・どこに行くにもマスク！マスク！というのかわいらしい感じがします。
- ・マスクの着用を子どもが嫌がること。
- ・気軽に外出ができなくなり、毎日どう過ごすか困っています。
- ・1歳児でまだマスクもできず、色んなものを触るので、どこまで気をつかったら良いか困ります。
- ・なかなか友達とも会えず、知り合うこともできず残念です。ずっと子どもだけとの時間が多いので大変です。

今年はコロナウィルスの流行があり、密にならないよう、参加される親子の組数を制限し、こまめな換気や消毒などを行い、感染予防対策をしながらの子育て支援室運営となりました。そのような中、「さくらんぼ」で元気いっぱい遊ぶ子どもたちの姿や、お母さん方の笑顔にふれると心も和みます。今後も親子の大切な時間、豊かな時間を保障できるように「さくらんぼ」の運営を心がけていきたいと思えます。

(文責 吉田真弓)

■ 2020 年度 子育て交流会、支援室開放日 利用者数

2020/3/12 現在

	交流会 / 回	子ども	大人	開放日 / 回	子ども	大人
4月	-	-	-	-	-	-
5月	-	-	-	-	-	-
6月	-	-	-	-	-	-
7月	-	-	-	13	63	56
9月	-	-	-	-	-	-
10月	12	53	45	9	62	51
11月	10	61	48	8	60	48
12月	7	49	36	5	38	30
1月	3	23	16	1	7	6
2月	-	-	-	-	-	-
3月	3	14	10	2	13	10
計	35	200	155	38	243	201

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため「-」は閉室とさせていただきます。

COVID-19下での地域の子育て支援

地域と連携していく研究所では、地域で子育て支援の役割を担っている団体とのつながりを大切にしたいと考えています。今回は豊明市立子育て支援センターすまいると、名古屋市緑児童館の職員の方に寄稿していただきました。

これからも子育てに寄り添う支援を目指して

豊明市立子育て支援センター すまいる

豊明市内には、『すまいる』・『あおいとり』と2か所子育て支援センターがあります。『すまいる』は、自然に囲まれた環境にある、内山保育園の1階に併設されています。『あおいとり』も住宅街の中にある青い鳥保育園の1階に併設されており、保育園の中の1室が支援センターとして運営しています。現在はコロナウイルス感染流行に対応しながら開所しているため、利用できる保護者の方は、豊明市内在住の方で、時間制限、人数制限、受付では検温、手指消毒、手洗い、マスク着用をお願いしながら運営しています。また、安全に利用して頂くために、利用時間中も室内の換気、おもちゃの消毒、ロッカー、ドアなどの消毒等も随時行っています。



『すまいる』は3部屋で遊ぶことができます。プレイルームでは、ママごとコーナー、絵本コーナー、赤ちゃんコーナーがあり、

月齢の低い赤ちゃんも安心して、遊ぶことができるようマットを敷きおもちゃも用意しています。多目的ルームでは、滑り台と三角のお山（クッション素材のもの）もあり、体を動かして遊ぶことができる場所になっています。時にはトンネルやハイハイできるマットなどアスレチック風にセットして遊ぶこともあります。ランチルームは、現在ランチタイムをお休みしているので、パズル、お絵かき、ブロック等で遊ぶお部屋になっています。お子さんがお気に入りのおもちゃを選び、ママと一緒に楽しんでいます。中庭には「おもち」と名付けられた滑り台があり、お空を見上げながらお外で遊

ぶことが出来ます。また、保育園と併設しているので、園児さんの元気な歌声や元気な姿に出会うこともありますよ。



利用して頂いたママからは、「豊明に引っ越してきて知り合いもなく、支援センターでママたちとの交流が持てうれしかった」「自分の考えを整理するきっかけをもらったり、他のお母さんと子育ての大変さを共有したりすることでストレスが和らぎました」「子どもの成長と一緒に喜んでもらえ嬉しく思います」などの声を頂いています。

豊明市子育て支援センターは、親子が安心して遊べ、気軽に相談ができる場所です。子育てに不安を抱えることもあると思いますが、「支援センターで子どもと遊びたい」「子育ての事聞いてみたい」「子育ては楽しい！」と子育てを頑張っているママたちを応援しながら、今日も運営しています。



「子どもは遊べば密になるもの。さて、どーする大人？」

名古屋市緑児童館 館長 塚本 岳

子どもにとって「遊ぶ」ことは「食べる」こと「寝る」ことと同じように成長に欠かせない必要なものです。そして子どもが遊ぶためには「三間」＝「時間」「空間」「仲間」も十分に保障されていないとうまく機能しません。現代の子どもたちはそもそもなかなか三間が充実していない環境下に置かれています。今回のコロナによりさらに三間が歪んでしまっているのが現状です。

緑児童館は、この「三間」をできるだけ充実させて、提供型やプログラム消化型ではない、「子どもの自由な遊び場、子どもの居場所」であるべく環境を整えています。したがってコロナの前から、0～18歳の子どもとその保護者が「いつでも」「誰でも」来られる場所としてあり続けることに重点をおいてきました。申し込み型の講座も行っていますが、あくまで児童館を知るきっかけとなるように行っています。そして、コロナにより講座等の開催は難しくなりましたが、「自由に来られる場」であり続けたいとの想いから「人数制限」「予約」という形はとらず、その代わりにの対策としてより密を避けられる「屋外」での活動に力を入れています。実際に児童館再開後の6～7月は、屋内は一切使わず中庭に児童館の機能を移した「お庭DE児童館」という形で運営しました。それにより、過度な制限をかけない居場所として運営ができたと思っています。

正直なところ、多少なりとも施設として制限をかけざるを得ない以上、子どもたちは児童館等の公共施設に来るよりも子どもだけで外で遊んだ方が楽しいのでは？と誤ってしまいます。公園、原っぱ、森、密を避けつつ遊び過ごすことのできる場所は屋外にありますので。ただ、そうは言っても、乳幼児を持つ親御さんはずっと自分の子どもと一緒に息がつかまることもあるでしょうし、話し相手が欲しかったりすることでしょう。今年第一子が生まれた方などは特にそうでしょうね。さらにはコロナにより幼児及び保護者のみではなく、小学生、中学生…すべての世代が、大なり小なり困りごとを抱えているだろうと思われます。「自由に集まったそれぞれが遊びながらも、悩みを共有できたり、あるいはお喋りすることで少し気持ちが安らいだりできる安心な場」が今まで以上に必要になって来ていると感じます。

その一つのモデルが、全国的にも展開されている屋外の自由

参加型の遊び場「冒険遊び場・プレーパーク」だと感じています。

緑児童館は室内よりは密を避けることのできる公園で「冒険遊び場・プレーパーク」を運営しています。毎週木曜日の午前に「ちびっこ冒険ひろば」、午後は「にいのみ池プレーパーク」という形で遊び場を開き、さまざまな年代の子どもたちが自由に遊び、過ごしています。

午前中は入園前の幼児親子中心に、午後は小学生～高校生、降園後の親子や、午前中からずっと遊んでいる親子もいます。遊ぶ内容もさまざまで、泥遊び、水遊び、コマやけん玉、工作、お散歩、お喋り、森遊び…。寒い日でも落ち葉で遊んだり、森の中を探検したりと遊び方はたくさん。それらの遊びをプログラム化せず、子どもたちが自由に「やってみたい」ことに挑戦できるようにしています。遊びにせよ、いや、遊びだからこそやるかやらないかを決めるのは子どもです。また、年中さんと中学生と一緒に遊んだりと異年齢で遊ぶことも多く、小さい子を持つ親にも大きい子の遊び、過ごし方を見てもらえる場もなっています。

学校再開以降、子どもたちは以前よりも忙しそうですが、ここに来て自由に過ごすことでバランスを保っているようにも見受けられます。このような遊び場が地域単位で当たり前のように存在すれば…と思いつつも、目の前の子ども（と大人）たちにできることをできる範囲で行っています。

緑児童館は「子どもは自由に遊ぶことで自ら育つ力を持っている」ことを信じて、提供型ではない場、支援者と被支援者という関係ではない場、子どもも含めた参加者みんなで作っていく遊び場をこれからも作っていきます。

ご興味のある方は一度遊びに来てみてくださいね。

「冒険遊び場・プレーパーク」@名古屋市緑児童館

「ちびっこ冒険ひろば」

毎週木曜日 10:00～14:00

「にいのみ池プレーパーク」

毎週木曜日 14:00～17:00



緑児童館 HP

支援室で人気の絵本・遊び紹介

近藤愛（さくらんぼスタッフ）

毎年度たくさんの親子さんに利用して頂き、スタッフ一同大変嬉しく、また皆さんにお会いできるのをいつも楽しみにしております。しかしながら、今年度のさくらんぼは新型コロナウイルスの影響により、春夏とお部屋をお休みさせて頂きました。皆さんお元気で過ごされているのか、遊び場にはお困りではないかと、もどかしい思いでスタッフ達も早い再開を祈っておりました。10月より少人数予約制での再スタートで、お部屋にはいつものように親子さんの笑顔や笑い声が優しく響いています。皆様お元気にお過ごしになられていて、とても嬉しく思います。いつでもどなたでも参加頂ける支援室に一日でも早く戻れますよう、スタッフ皆衛生管理に努めながら支援室でお待ちしております。

支援室では、0～3歳のお子さんが楽しめるおもちゃや絵本がたくさんあり、好きなものを選んで遊ぶことができます。また年齢別の交流会は、お子さんが楽しく遊んで参加できる遊びや絵本を紹介しています。支援室でお子さんが楽しんでいたものを、少しですがご紹介させて頂きます。

はじめに、お子さんみんなが大好きな『絵本』です。大きな子はもちろん、赤ちゃんだってとても喜んで見えています。体をバタバタ動かしたり、「あっ、あっ！」と指さしたり。お母さんのおひざでお気に入りの絵本を何度も読んでもらっている場面も、たくさんありました。

繰り返しのある絵本

- ・いないいないばあ
- ・だるまさんが
- ・ぞうくんのさんぽ



同じフレーズが繰り返されるのが心地良

く、何だか楽しくなる絵本です。絵本に向かっていないいないばあをしたり、だるまさんやぞうくんの動きを体いっぱい真似したりする子どもたち。スタッフの読む声や動きも、つられて大きくなります！

色彩豊かな絵本

- ・もこ もこもこ
- ・はらぺこあおむし

不思議な絵に不思議な言葉のもこもこもこ。鮮やかな色使いの変なかたちに、子どもは惹きつけられるのでしょうか。貼り絵が色とりどりで美しいはらぺこあおむし。あおむしの

キャラクターやたくさんの食べ物も、ポップでかわいいです。”あな”も指でたどって楽しいしかけ。支援室のはらぺこあおむしの絵本もそろそろあなが大きくなりそう？！

親子のふれあい絵本

- ・くっついた
- ・こちょばこちょばこ
- ・おっぱいいっぱいのだこは

親子でほっぺをくっつけ合ったり、体をくすぐったり、だっこをしたり。絵本を読みながら、一緒になって触れ合える絵本も人気です。いっぱい触れ合って、みなさんにここに！支援室も温かい雰囲気になります。

次に、支援室で人気の『手遊び・ふれあい遊び』です。これまでの交流会でたくさん遊んだ遊びをご紹介します。

- ・パンダうさぎコアラ
- ・やさいのうた
- ・とんとんとんとんアンパンマン

小さな子から大きな子まで、元気いっぱい歌います。交流会のはじまりやおわりにと、支援室では十八番の手遊びです。

- ・ちょちょちあわわ
- ・バスにのって
- ・おおなみこなみ

ママのおひざに座って、揺れたりはずんだりくすぐられたり！ふれあい遊びはみなさん笑顔で楽しんでいます。大きな子は、お友達と手をつないで遊ぶ集団遊びも大好きです。はずかしがり屋さんも、ママと一緒に笑顔で参加しています。

このように支援室では、たくさんの親子さんに交流会に参加して頂いてきました。これからもたくさんの親子さんとお会いできるのを、スタッフ一同楽しみにしております。元気いっぱい一緒に遊びましょう！



2021年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所では、2021年度の暫定テーマを「子どもの育ちと安心安全な保育」としました。このテーマに沿ったセミナーや講演会等の開催を通じて、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生を対象とした研修の機会を提供し、地域とのつながりを重視した事業を展開していきます。地域で活躍されている子育て支援のNPO団体等とも連携し、ネットワークを大切に交流していきます。子育て交流室「さくらんぼ」での子育て交流会等も、感染症対策を徹底しながら実施いたします。

夏のセミナー

- 講演：未定
- 演題：未定
- 日時：2021年7月18日（日）（予定）
- 場所：桜花学園大学・名古屋短期大学（または オンライン：zoom）

冬の講演会

- 講演：井桁容子氏（非営利団体コドモノミカタ代表理事）
- 演題：子どもの育ちと安心安全な保育
- 日時：2021年11月21日（日）
- 場所：桜花学園大学・名古屋短期大学（または オンライン：zoom）

編 集 後 記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第18号をここにお届けします。今年度は感染症拡大のため、夏のセミナーは実施できず、冬の講演会もオンラインでの実施となり、子育て交流室も閉室せざるをえない時期がありましたが、活動を継続いたしました。本号には、今年度の研究テーマ「関係性のなかで育つ子ども」に沿った内容でご講演、ご寄稿いただき、研究所が主催する冬の講演会の報告、子育て交流会の報告等の研修・事業部門の報告、桜花学園大学保育学部や名古屋短期大学保育科の教員による研究・実践報告を収めております。研究者や地域の実践者だけでなく、子育て家庭のみならず、本号をきっかけに、本研究所の取り組みをご理解いただき、これからの保育・教育・子育てについて共に考えていただければ幸いです。

【2020年度 研究所役員体制】

- | | | | | |
|---------|-------|---------|-------|------------|
| ● 所 長 | 高須裕美 | ● 主任研究員 | 吉田真弓 | 平野朋枝 |
| ● 副 所 長 | 堀 由里 | | 太田早津美 | 伊藤茂美 布施佐代子 |
| ● 事務局員 | 本多美須子 | | | |

表 紙 デ ザ イ ン

高田吉朗（保育科）